

昭和62年9月24日～10月17日
大学図書館2階展示ホール

枕草子・徒然草

今回は、平安中期に成立した清少納言「枕草子」と、その影響を受けて鎌倉末期に成立した、後世における王朝文学理念の代弁者というべき卜部兼好の「徒然草」、この随筆文学の二大傑作を紹介する。

枕草子

枕草子の成立は、明確ではないが、作者の仕えた中宮定子が長保二年(1000)十二月十六日に没した後、長保三年以降といわれる。伝本系統は雑纂本形態の三卷本・能因本。類纂本形態の堺本・前田本の四系統がある。諸説あるが、原形に近いものは、三卷本・能因本系の雑纂本であろうというのが定説となっている。なお江戸時代の注釈書の本文は、すべて能因本によっているが、現在は三卷本が原形に一番近いとされており、このことが三卷本との本文校定に問題をなげかけている。

1 枕草紙

(黒川文庫)

写本二冊(上・下) 美濃判 十行書き 朱書入 奥書「這本以後光厳院宸翰不違一字 書写功了 云々」 印記「正木園文庫」「黒川真道蔵書」

この後光厳院宸翰本には、「群書類従」所収後光厳院宸翰本があり、堺本系統に属するとされる。

2 枕草紙

(黒川文庫)

写本二冊(上・下) 美濃判 十三行書き 奥書なし 見返しに「本書近衛植家公息女 慶福院殿筆」 外題「清少納言枕草紙」 表紙に「異本」と朱書あり 印記「新宮城書蔵」(水野忠央) 「黒川真頼蔵書」 「黒川真道蔵書」

本書は、堺本系統であるとの指摘がされている。

3 枕草子

(黒川文庫)

版本七冊 美濃判 十一行書き 慶安二年(1649) 京都 沢田庄左衛門板 黒 押型表紙 原題簽 外題「清少納言」 表紙に「異本」と朱書あり 「春曙抄」の巻次書入 印記「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」「黒川真前蔵書」

この慶安二年刊本は、古活字本(能因本系統)を三卷本によって校訂したもので、能因本系統に属するとされる。

4 清少納言万歳抄

(黒川文庫)

加藤盤斎著

版本十五冊(十五卷) 美濃判 延宝二年(1674) 京都 田中権兵衛板 内題(貼紙にて)「清少納言枕草子抄」 第一冊遊紙に盤斎略伝(貼紙)あり 印記「清水濱臣蔵書」(清水浜臣) 「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」

「枕草子」全巻にわたる注釈書としては、最古のもの。一般には「清少納言枕草子抄」といわれる。「枕草子」全体を体系的な「教諭の書」と見ようとするところに特色がある。

5 枕草子春曙抄

(黒川文庫)

北村季吟著

版本六冊(十二卷) 美濃判 無刊記 第一冊前に「装束撮要抄(享保十四年版)」を合綴 押紙・朱墨書入無数 第一冊巻尾に「本書は亡父

真頼年来研究の書入なれば大切に保存すべきはいふもさらなり整理して世に伝ふべきものなり 明治40年12月 黒川真道識」。巻末に「此朱或墨書入者文化五年辰七月以清水浜臣蔵本写之畢 長尾景寛 花押」・「安政元甲寅年(1854)十一月鈴木真道蔵本にて写之畢 会田安昌」・「明治十二年八月加遇意了 黒川真頼」・「明治十三年一月以青墨加遇説了 墨水万里」がある。尚、「春曙抄」の序文三丁半の書写しを別に付す。印記「會田家蔵書」(会田芳園)「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」
頭注と本文傍注を併用した江戸期の代表的な注釈書。旧注を取捨選択して、穏当簡潔な注を施し、最も流布した物の一つであるが、本文の底本が能因本の末流本であることが、本文校定に問題があるとされている。

6 清少納言旁註 (黒川文庫)
岡西惟中著
版本十冊 美濃判 十行書き 無刊記 朱書入 印記 「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」
本文に詳細な傍注を付し、頭注はない。考証等は本文欄外に別立てとして説明してある。本文は、凡例によれば、細川幽斎よりの五巻本を使用したとあるが、実際は、「慶安二年刊七冊本」を底本としている。

7 清少納言図式 (黒川文庫)
岡西惟中著
版本一冊 美濃判 無刊記 印記 「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」
「清少納言旁註」の凡例・図式を抜き刷りし、枕双帯段分目録を付す。

8 清少納言年立 (黒川文庫)
写本一冊 半紙判 奥書なし 見返しに「栗原柳庵自筆本」 印記「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」
寛和二年六月及び正暦元年から長徳二年までを年各に「枕草子」中の事項を抜書きし巻数を明記している。清少納言周辺関係者の略年表を付す。

徒然草

徒然草の成立は未詳であるが、南北朝内乱期以前の執筆説が有力である。本文は、全体を二四三段に分け、第一三六段までを上巻、第一三七段以降を下巻に分けた「徒然草文段抄」(北村季吟著)・「徒然草諸抄大成」(浅香山井著)の読み方が定着している。形式は「枕草子」を意識した雑纂形態である。

1 徒然草 (常磐松文庫)
写本一冊(上巻) 美濃判 十行書き 綴帖装 金泥草花人馬絵表紙 奥書・内題なし [室町期]写 「薬師あつしげ」の段まで

2 つれづれ草 (常磐松文庫)
写本三冊 半紙判 十行書き 綴帖装 奥書・内題なし [江戸前期]写 淡彩の絵本で、雅趣にとむ。箱書に「住吉具慶絵」とあるが、明確ではない。

3 つれづれ草 (常磐松文庫)
版本二冊 美濃判 十四行書き 絵入 元文五年(1740) 書林鼎直堂板 角書「新板絵入」

4 徒然草七箇之口決 (常磐松文庫)
写本一軸 17.5cm 表紙欠 片仮名混り文 「延宝七年(1679) 応向亭匹如身大休 花押」 加藤盤斎より伝授の旨奥書あり

5 徒然草吟和抄 (黒川文庫)
版本五冊 美濃判 首書絵入 元禄三年(1690) 大坂 帯屋甚右衛門ほか板 印記「黒川真道蔵書」
「国書解題」に「諸注の意を参考取捨して冠頭に註記したもの、一名を「徒然草絵抄」とも云へり。」とある。

6 徒然草句解

(黒川文庫)

高階揚順著

版本七冊 美濃判 寛文元年(1661) 京都 山屋治右衛門板 印記「黒川真道蔵書」

徒然草を儒教的な教訓の書ととらえ、本文間に二行割の注釈を付す。簡単平易を特徴とする。

7 徒然草文段抄

(黒川文庫)

北村季吟著

版本五冊(七卷中五、七欠) 美濃判 寛文七年(1667) 板印記「黒川真道蔵書」

山岸文庫所蔵〔「徒然草文段抄」版本二冊(五、七卷) 黒川文庫〕とにより、完本となる。

注釈書「寿命院抄」・「野槌」・「慰草」・「盤斎抄」に自説を加えたもの。他の季吟の注釈と同様、穩健中正な注釈書といわれ、当時流行した書物である。

8 鉄槌 増補

(黒川文庫)

山岡元隣著

版本六冊(上・下各三卷) 美濃判 貞享二年(1685) 京都 永田長兵衛板 墨書入 印記「黒川真頼蔵書」 「黒川真道蔵書」

「国書解題」に「青木宗胡の『鉄槌』に基き、諸家諸抄の要領を取りて詳註したるものなり。」とある。山岡元隣は京都の人、字は徳甫、号は而盤斎。北村季吟の門人。

参考

- 国書解題 増訂 佐村八郎著 臨川書店 二冊 大正15年刊
- 日本古典文学大辞典 全六巻 岩波書店 1983~1985刊
- 諸説一覽枕草子 塩田良平編 明治書院 昭和45年刊
- 徒然草事典 三谷栄一編 有精堂出版 昭和52年刊 (徒然草講座別巻)